
ゴーレムマイスター

志冥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゴーレムマイスター

【Nコード】

N6941Y

【作者名】

志冥

【あらすじ】

駄目な兄と優秀な弟が土機兵^{ゴーレム}に出会った事がきっかけで異世界へと飛ばされる。その世界は自分達がいた世界とよく似た世界だった。しかし、魔科学^{まかがく}が発達したその世界が以前までいた世界とは大きく異なる事に次第に気づいていく。デコボコ兄弟はその異世界で暮らす事を余儀なくされ、色々な波乱に巻き込まれていく事になる。異世界転生の魔法ファンタジーです。週1更新を心がけていきますので宜しくお願いします。感想、評価お待ちしております。

プロローグ

「兄さん、右腕の動きが変だ。魔力はしっかり供給されてる？」

「んな事言ったって、うわつ。」

土と金属を混ぜた様な不思議な材質で作られた操縦席。中央には水晶玉みたいな大きな紫色の玉。

尻が座面から飛び上がるほどの縦揺れの中、俺はその玉にしがみ付き、訳も分からず強く念じる様に力を込める。

紫の光がその光を増していき、その丁度真上に表示されるモニターに映される人型の映像に光が染み渡っていき、暗かった右腕部分も光を帯びた。

「な、何とかいけそうだ、おらあ！ 跳べえ！」

内臓が浮き上がるみたいな感覚に少々の吐き気を催す。

操縦席左右壁面と正面にあるモニターの奥壁面から見える外の風景が上下したかと思えば、広大な景色が眼下に広がる。

内臓が暴れまわったせいなのか、興奮しているせいなのかかわからないが、胸が煩い位に高鳴っている。

「兄さん、前！ 前、前！」

激しい衝撃と共に、更に激しく揺さぶられた内臓と脳。目の前の広大な景色は一瞬にして星空に変わる。

奇妙な操縦席から引きずり出され、今だ焦点の定まらぬ俺の視界にぼんやりと映るのは俺を心配そうに見つめる我が可愛い弟。

「兄さん、大丈夫？ 怪我はない？」

「お、おう。死んだ婆ちゃんにちよいとばかり会って来ただけだ。」

「お婆ちゃんは死んでないでしょ。それより、すごいね、この……」

弟が俺と共に巨木へと激突したソレを見つめる。

操縦席と同じく、土で出来ているのか、金属で出来ているのか、不明瞭な巨体。^{いりよう}

かなりの高さから猛スピードで落下し、巨木に激突したにも拘らず、操縦者共々無傷なのは脅威的と言えた。

「これが、俺の……土機兵。^{ゴレム}」

山道を走るバスの中。

二時間に一本という信じられない程に怠慢なバスを寸での所で乗り逃し、二時間待ってやって来たバスにやっと乗った俺と弟は祖母の家へと向かう道中だった。

事故で両親を亡くした俺達は唯一の身寄りである祖母に面倒を見てもらう事になっている。

祖母は偏屈な変わり者で人里離れた山の中に住んでいた。

祖母には一度として会った事はないが、高校二年の俺と、今年中学を卒業したばかりの弟では二人で生活するには思い切りが必要で、思い切りの足りない俺は祖母を頼る事に決めた。

俺と違い素直な弟は、俺の決断に異を唱える事なんて滅多にない。けれど、嫌な顔一つせず、俺に従う弟を見ていると少し胸が痛んだ。

俺と正反対で優秀な弟は有名私立に特待生枠で入る予定だった。

最初は俺も「お前は折角いい高校に受かったんだから、こっちに残った方がいい。向こうでバイトすればお前一人の生活費くらいはなんとか捻出してやるよ。」なんて兄貴らしい事も言ってみたものだが、流石に非の打ち所のない弟は「兄さんと一緒なら高校はどこだって構わないよ。僕がいたい場所はいいい高校なんて所じゃなくて、^{さすが}

兄さんと一緒にいられる所だから。」なんて、もしも妹であればうっかり一線を越えてしまいそんな殊勝な発言をした。そんな訳で俺は珍しく發揮した兄貴らしさをあっさりと引っ込めて弟を連れて行く事にした。

終電まで走破したオンボロバスを降りると、年に2、3人は遭難者が出ていそうな森の中。

携帯を開けば当然の様に圏外。

時折目の前を横切る虫は拳ほどではなかったにせよ、都会育ちの俺の目にはそのくらいの大きさに映った。

「一応、婆ちゃんの手紙には地図が載っていたんだが……」と言って、弟に差し出す。

その手紙を見て、弟の顔が青褪^{あせ}めていくのが分かる。

かなり大雑把に描かれた地図だとは思ったが、物事をあまり深く考えない俺は着けばその地図で分かるものなのだろうと安易に考えていた。

それがそもその間違いで目の前に広がるのは土と木だけで方角すら分からない。

地図に描いてあるのは俺たちのいるバス亭と大きな木、そして『この辺』と書いて矢印の引いてある民家と思わしき絵。

目に付く木はすべて樹齡何年か、というくらいの巨木ばかりでそれが祖母の言いたい大きな木なのかさっぱり分からない。

「と、兎に角歩こう。」

「兎に角歩いちゃったら、絶対遭難しちゃうよ！」

最もな言い分だ。

「何だか喉が渴いたからアイスが食べたいよな。」

俺達はそのままバス亭のベンチに座り込んでいた。

弟は俺の言葉を無視したまま、何とか解読しようしているのか祖母の茶目っ気溢れる地図を睨み付けている。

「俺達、このまま死んじゃうのかな？」

「兄さん、ちよつと黙っててよ。それにここから動かなければ、最悪引き返す事もできるでしょ？」

「まあな……しかし、ここで一泊はしなけりやいかんけどな。」

「へ？」

優秀な弟には珍しく素^すつ頓^{とん}狂^{きやう}な声を上げる。

地図の解説に夢中になっていたせいも、時刻表を見ていなかったのだろう。

俺はする事もなく、時刻表を眺めていたから知っている。

さつき俺達が降りたバスが本日最後の一本だった事を。

弟は一層必死になって地図に齧^{かぶ}り付いた。

陽が落ち、辺りを黄昏が包み始める。

明らかに焦り始める弟を横目で見る俺。

こんな時、駄目な兄貴でよかったと思う。

窮地に直面した時、弟が不安そうにすると皮肉な事に俺の頭は段々と冷静になり、心は穏やかになっていく。

「さあて、頭を使うのはやめて、今度は身体を使うか。」

俺はそう言つて弟の肩に手を引いた。

鞆からスナック菓子を取り出して、それを道々落とし、目印にして迷わない様に歩いた。

「兄さん、これ動物とかが食べちゃったら目印なくなっちゃうんじゃない？」

「大丈夫だ、こんな事もあるかと、『すっぱーヨ梅じそ味』を持ってきた。動物は『すっぱーヨ』は食わねえだろ？」

「そうだね。それなら安心だ。」

弟がバスを降りて以来初めて笑顔を零した。

俺はそれに笑い返して、先に進む足を速めた。

本当に動物が『すっぱーヨ梅じそ味』を食べない保証は勿論^{もちろん}ないが、それでも言わないと弟が不安に思う。

と言うよりも、そんな事は弟も重々《じゅうじゅう》承知だが俺がそんな馬鹿な冗談を言う事で弟は落ち着きを取り戻してくれる。出来た弟の事だ、馬鹿な兄貴を護らなければと思うのだろう。本当に駄目な兄は責任を持って必要以上に駄目な振りをしなければならぬ。

少なくとも俺と弟はそうやってバランスを取っている。

すっかり陽は落ちて暗くなった森。
唯一の救いは、晴れた空に浮かぶ満月が辛^{かろ}うじて視界を残してくれている事。

それとスナック菓子の『わさびポーク』を持ってきていた事。
無くなった『すっぱイヨ』の代わりに『わさびポーク』を落としながら、暗い森を歩く。

何処からともなく、梟の鳴き声が聞こえる。

ほんの何日か前に魔法使いの映画を見ていて、主人公の相棒である白い梟がこんな風に鳴いていたから間違いない。

2、3kmほど歩いただろうか、人里は見えず、辺りの木々が更に鬱蒼^{うつそう}と生茂^{おいしげ}り、目にした事のない草花が目立つ様になってきた。

「クソ婆あ、あの絵心溢れる地図は方角だけは合ってたんだろうな。信じてるんだからな。」

疲れの所為もあり、苛立つてきた俺は悪態を付き始める。

道はどんどん細くなっていくし、心なしか山道をずっと登り続けている気がする。

「今、何か光らなかった？」

「あん？ 俺には見えなかったぞ。」

「確かに光ったよ、向こうの方で……」

弟は木々の間を指差すが、暗がりでも数m先も満足に見えない状況では何があるのかわからない。

ハツとして、辺りの手ごろな木の枝を手に取り構えた。

『もしかしたら、獣か何かの目が光ったのかもしれない。』

声には出さなかったがそう思った。

弟も感じているのだろうか、俺の裾を強く握り締めている。

「だ、大丈夫だ。兄ちゃん、喧嘩だけは強い知ってるだろ？」

『しまった、声が震えた。』と後悔したが、弟は気付かなかったのか、それとも気付いていない振りをしてくれたのか分からないが「頼りにしてる。」と俺の顔を見返してほほ笑んだ。

本当に出来た弟である。

妹ならば獣に喰われて、この世を去る前に！ と勢いに任せて押し倒している所だ。

けれど、獣ではなく、民家か何かがあるのかもしれない。

森の中では、その確率も低いが、万が一にもと考えると容易には去れない。

俺達は光の見た方へとゆっくりと近づいて行っただ。

そこには崖なのか、植物の集合体なのかよくわからない、草木に覆われた丘が聳え立っている。

目を凝らしてよく見ると、草木の隙間から金属の様な物が見えた。

光の正体はその金属が月明かりを反射したからと思われた。

俺は絡まっている蔓を引き剥がし、その金属を掘り起こそうとした。かなり大きいソレは完全に草木に絡まれており、少し剥がしたくらいではその全容を現さない。

金属と土の様な素材で出来たそれに、何か文字が書かれている。

かなり古いものなのか、その文字は掠れていて、辛うじて一行読める程度だった。

「虚構よりも真の現実を……」

「兄さん、これは一体？」

言い知れぬ不安感が湧きあがる気がした。
弟もそうなのだろう、少し声が震えている。

けれどそれと同時に湧きあがる探究心が、纏わりついた蔓を更に剥がさせた。

ある程度剥がすと、それが人型をしている物だと分かった。

無我夢中^{むがむちゅう}で蔓を剥がし続け、その全容が明らかとなる。

「なんだ、こりゃ……。」

巨大な人型の建造物。

体長は三メートル程だろうか、少なくとも俺と弟の倍くらいの大きさはある。

頑丈そうな不思議な素材でできた身体。

まるでSF映画^{エスエフ}に出てくるロボットだ。

文字が書いてある部分の下には紫色の水晶玉のような物が付いている。そこだけ明らかに違う素材で出来ていたので俺は何気なく、その玉に手を触れた。

すると触れた部分が強烈な光を放ち始め、周囲の大気を吸い込む様にそれを中心に風が吹き荒ぶ^{すさぶ}。

恐怖を感じ、手を放そうにも不思議とその手は離れない。

「ふ、ふざけんな、なんだよこれ。」

懸命に引っ張るが、玉に吸いつく様に俺の手は離れようとはしない。弟が後ろから腰に手を回して一緒に引っ張るが、二人がかりでも一向に離れる気配はない。

「何だか、やばそうだ。お前は早く離れろ！」

「兄さんを放つて離れられるわけないだろ！」

さらに強い光が瞬き^{またた}、視界を奪われる。

そして身体が宙に浮く様な感覚の直後、何かが炸裂した様な音と共に俺は身体を吹き飛ばされるような感覚に襲われた。

001話

薄っすらと目を空けるとそこは木々の生茂る森の中。おいしげ

何かが爆発した気がして、死んだと思ったが生きているし、身体もどこも痛まない。

周囲もなんら変わらず、陰気な森の中のまま。

ただし、かなりの時間気を失っていたのか、すっかり朝日が昇っている。

傍に倒れていた弟も目を覚ます。

「に、兄さん？ 僕達一体？」

「どうやら、何ともないみた」

それに気づいた俺は驚きに声が詰まらせた。

気を失う前にあったはずの、巨大な人型の建造物が跡形もなく消えている。

目を擦こすって確認するが、やはりないものはない。

「どこに行っちゃったんだろう？」

「さあな。この風景からして、俺達がふっ飛ばされたわけでもなさそうだし、あの巨人が勝手に何処かへ行ったとは思えないな。」

「あれって、動くの？」

「さあな。俺が知るわけないだろう。それより、婆ちゃんがきつと心配してる、陽のある内になんとか辿り着こうぜ。」

歩き出して、すぐに一つの疑問が浮ひこかんだ。

ばら撒いてきたスナック菓子が一欠ひこけらもない。

まさか本当に動物が食べたのか？ と特にそれ以上は気に留めなかったが帰り道がわからなくなったのは少し不安だ。

一時間程、当てもなく歩き続けた所で「兄さん、あれって。」と弟が何やら上の方を指差している。

その方向へと視線を向けるとそこには周囲の木から頭一つも二つも抜け出た巨大な木が聳え立っていた。

「クソ婆。本当にでけえじゃねえか。でもバス停からじゃさすがに見えねえよ……」

俺と弟は行く足を速めて、その巨大な木へと歩を進めた。

大ききの所為か近くに見えた木が意外に遠い。

しかし、人間って生き物はゴールが見えると頑張る事ができる現金な生物で、距離はあったが、不思議と辛さは感じない。

巨大な木の下に着いた頃には一軒の小屋がすでに視界に入っていた。地図の絵とはかけ離れた雰囲気の小屋だったが、そこは敢て突っ込む事はせず、急ぎ駆け寄る。

平屋の古い家と言うか、小屋。

外には今時珍しく井戸があったが、苔塗れな所を見るとさすがに使っては無いのだろう。

けれど、こんな森の奥まで水道ってのは通っているものなのか？と疑問に思ったが気にしない事にする。

俺は古惚けたその小屋の扉を勢いよく開けて、声を張り上げた。

「遅くなつてすいません！ 孫の日向奔と翔です。婆ちゃんいますか？」

玄関向こうに広がる木製の床で出来た長い渡り廊下に向かって大声を出す。返事がない。

それから何度か「すいません。いらっしやいませんか？」と繰り返す。

やがて廊下の奥から「何度も言わなくなつて聞こえているよ！ 年寄り扱いするんじゃないよ、まったく。」と悪態を付く年配の女性の声が聞こえた。

「絶対聞こえてなかっただろうが……」

「何か文句でも言ったかい？」

小声で呟いた声を見事に聞き取り、反応が遅かった割に地獄耳だっ

た祖母の怒声が飛んできて、俺と翔は思わず口を手で塞いだ。

「まったく、誰だ」

祖母らしき年配の女性が目の前で驚きの表情を湛えて立ち止った。手に持っている蜜柑が床に落ちて、ぐちゃりとなる。

初めて会う孫に感動しているのか、まるで死人でも見るかのような驚き表情。

「お婆ちゃん、初めまして。俺が奔で、こっちが翔です。」

人見知りの激しい翔は声を発さず、軽く会釈した。

祖母はまだ驚いているかのような表情で右手を前に差しだし、ゆっくりと俺達に近づいて来た。

差し出しされた手の指先が何やら小刻みに震えている。

『予想以上に耄碌してんのかな？』と少し心配になる。

「そ、そんなに驚かなくても。確かに道に迷って一日遅れちゃったけど。」

「あんた達、死んだんじゃ……」

「は？ そんな大袈裟な、一日遅れたくらいで。」

「家族四人、事故で死んだって……」

「父と母は亡くなりましたが、俺達は生きていますよ。御厄介になると連絡を入れた筈なんですが？」

「あんた達、モンスターだね？ 私を騙そうたってそうはいかないよ！」

「いや、ちよつと、婆ちゃん　ぐっ！」

祖母が手に持っていた杖を俺に向かって翳した瞬間、柄の部分に付いていた見覚えのある様な紫の球が光を放ち、放たれた光が俺の身体を貫く様に奔ったかと思うと同時に腹部に激痛を感じた。

「ちよつと、待ってくれよ。ってか一体今何したんだよ？」

「問答無用じゃ！ この変身モンスター！」

俺が両手を上げて降参のポーズを取った瞬間。

祖母は振り上げた杖をそのままに動きを止めた。

「お前、その腕の Magic reality device をど

こで手に入れた？」

腕を見てみると見覚えのないブレスレットが嵌められている。

そのブレスレットにも祖母の杖と同じ様な紫の球が嵌められているのに気が付いた。

祖母はブレスレットをととても気にかけている様だが、俺にはいつ嵌められたのか、これが何なのかも皆目見当がつかない。

「は？ 何だつて？」

「その腕につけているMRDの事を聞いているんじゃ。」

「マジックなんかだか、エムなんかだか知らねえけど、俺にはわけがわからねえよ！」

「まあモンスターがMRDを付けているわけがない、話だけでも聞いてやるう。」

そう言つて、祖母は杖を下したが、警戒した様子はそのままに、俺と翔を中へと招いてくれた。

古惚けた外見通りの古惚けた廊下を後に付いて進むと、祖母の寝室らしき部屋へと招かれた。

寝室には大きなパソコンが置いてあつて、無数の配線が壁や床に張り巡らされていた。

その光景はまるで『電子の森』だった。

椅子に座るよう促された俺達は、軋みの激しい木製の椅子に腰かけ、バス停に着いてからここに来るまでの事や、自分達の事を思いつく限り祖母に話して聞かせた。

しばらく訝しげな表情で考え込んでいた祖母は、自分の頭の中身を整理するかの様に淡々と語り始めた。

「父親と母親を事故で亡くして、貴様らは祖母である儂を頼つてここまで来た。しかし、ここに向かう道中、不思議な人型の建造物を見つけ、それに触れて気を失ったと。お前達の言っている事が本当なら、お前達はもう一つの世界から来たのかもしれない。」

「は？ それはどういう」

「多元世界って事ですか？」
バラレワールド

「は？ パラ……なんだよそれ？」

「考えられん事だが、どうもそうらしい。お前達がMRDの存在を知らない事も頷ける。」
うなず

「こつちの世界では、それは当り前の物なんでしょうか？ それは
お婆ちゃんが先程使った不思議な力と関係が？」

「おい、待て話を進めるな！ パラなんとかの件くだりからもう一回」
「お前達の世界には魔法も存在せんのか？」

今の質問の意味はわかる。

俺も翔もさすがに言葉を失った。

魔法なんてものはRPGや御伽話ロープレイングゲームを基にだけの存在で現実にあるわけがない
と言うのが俺達がいた世界の常識。

しかし、どうもこつちでは違うらしかった。

「魔法があるってのかよ？」

「ああ、そこから説明が必要なのかい。少し長くなるぞ？」

祖母は億劫おっくうそうに眉間に皺しわを濃くして、俺と翔の顔を見渡してから
確認する様に言った。

「結論から言えば、こちらの世界には魔法が存在する。しかし、それ
もほんの20年ほど前に生まれたものだ。事の初めはVirtu
al reality gameリアルティゲームだった。そつちの世界にもゲーム
はあつたじやろ？ 元は視覚や聴覚のみで楽しむ遊びだったそれに
他の感覚機能への刺激を追加したのじゃ。痛覚や、触覚、味覚や嗅
覚。そこまで来るとその世界は一種の仮想現実となる。ここまでは
わかるな？」

辛うじて、納得はできないが理解はできる説明に曖昧あいまいに首を縦に振
ると、祖母は湯飲みの茶を一口飲み、続けた。

「大勢の人間がそれに没頭したよ。その内に今度はアダルトな目的
に使用され始め、仮想現実で男は絶世の美女を抱き、女は絶世の美
男子に抱かれたわけだ。そこまで来るとVR《仮想現実》技術が進

歩し、普及するのはあつという間じゃったさ。ひっひっひっ」

と下卑た笑いを浮かべる祖母。

アダルトなの件^{くだり}辺りから慌てて翔の耳を抑える俺。

「兄さん。今、お婆ちゃんなんて？」

「世の中には知らない方がいい事もあるんだ。さあ婆ちゃん続けてくれ。」

「人間は完全にVRにのめり込んだ。すべての欲望を満たしてくれるわけじゃから当たり前じゃな。しかし、人間とは愚かな生き物で遂にはそれだけでは飽き足らず、VRの外、つまり現実の世界に仮想を持ち出そうとしたんじゃ。それが魔法の始まりじゃ。儂の杖や、奔のプレスレットの様なMRDが開発された。MRDを^{かい}介せば、仮想を現実に変えられる様になったわけじゃ。」

「そりゃあ一体どういう仕組みなんだよ？」と俺は腕のプレスレットを睨み付けた。

嵌めこまれた紫の玉が鈍く光った気がした。

「研究の結果、MRDを介して仮想を現実に変えられる量には個人差がある事が分かった。その力を魔力と呼んだ。魔力の多い者ほど大きな仮想を現実へと変える事ができるし、魔力の小さい者は小さな仮想しか現実にはできん。まあそんな魔法に関しての研究を魔科学と呼び、日夜研究され始めたのが最近の事じゃ。MRDを悪用してモンスターを生み出す輩が現れたしたのも最近の事じゃが……」

「モ、モンスターがいるのかよ？」

「召喚魔法と呼ばれる技術じゃな。かなりの魔力がないと出来ない事じゃが、MRDを持つてすれば可能じゃ。勿論、^{もちろん}魔科学に関しては魔力の大小や召喚魔法以外にも色々あるが、それは追々《おいおい》でいいじやろう。大体この世界の事はわかったか？」

正直いまだに理解はできても、納得はできない。

信じる事ができないと言った方が正しいか、祖母の話は俺達の世界では漫画や小説なんかで描かれる空想の話と何ら変わらない。

けれど祖母が不思議な力を使うのを目の当たりにした俺達は信じるしかなかった。

そんな世界に飛ばされたのなら、俺達が時空を飛び越えたのも強^{あなが}ちあり得ない話でもない。

「それじゃあ僕達はそのMRDの力でこの世界に呼ばれたって事になるのかな？」

一瞬、困惑した表情を浮かべた祖母だったが、自信なさげにゆっくりと答えた。

「正直、それは考えられん。時空転移や時間転移は理論上は可能だが、あまりにも膨大な魔力が必要で、そんな魔力を持った者は絶対に存在するわけがない。もしそんな化け物じみた魔力を持つ者がいたとしても、現存するMRDでは、そこまで強大な魔力に耐える事は絶対にできん。」

この世界の事は大体把握した。

俺達の世界とは別の選択をしたもう一つの世界。

並行世界、多元世界とかつて呼ばれるものらしいけれど、正直そんな事はどうでもいい。

何故俺達がこの世界に来る事になったのか？　そしてどうすれば、元の世界に戻る事ができるか？　そっちが知りたい。

けれど、俺達にとって最重要のその問題に関しては、解決の糸口すらも掴めず、祖母には皆目見^{かいまくけんとう}当がつかない様子だった。

もちろん、俺達にも分かるはずもない。

そして、あの大きな人型の建造物は一体何だったのか？

大きな疑問を無数に残したまま、俺達兄弟はこつちの世界で暮らす事を余儀なくされた。

001話（後書き）

今話は会話文がかなり多くなり、説明文の様になってしまいました……。

反省事項は絶えませんが、また感想アドバイスお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6941y/>

ゴーレムマイスター

2011年11月27日17時52分発行